

## ユジノサハリンスク旅行記 ～第47回日ロ研究交流会に参加して～

隼野 寛史

## 出発まで

7月2、3日の日程で、道総研水産研究本部とサハリン漁業海洋学研究所（サフニコ）との研究交流会がユジノサハリンスク市内で開催されました。この日ロ研究交流事業はこれまで20年以上も続けられており、今回で47回目を迎えます。双方の研究機関を毎年交互に訪問しながら交流が図られてきました。今回は道総研から函館水試の佐藤部長を団長として、稚内水試の鈴木研究職員と筆者の3名が派遣されました。さけます内水試としては、中島美由紀さん（2010年）、永田光博さん（2011年）、小出展久さん（2013年）に続いて、筆者が4人目となります。

派遣者3名にとっては、今回が初めての海外出張となりましたが、訪問先はかつての樺太です。皆、稚内での勤務経験もあり、初めのうちは隣町へ行くような気楽な気分で構えていましたが、渡航手続きを進めるにつれ段々と、サハリンはとても近くて遠い地であることを実感しました。というのも、ロシアを訪問するためには、先ず、ビザの申請が必要です。その際、パスポートのほかに身元引受人（今回はサフニコ代表者）からの招待状（インビテーションレター）と宿泊先の支払い証明書（バウチャー）が必要になります。さらに現地では滞在中、パスポート・ビザ・出入国カードのほかにホテルで発行される「滞在登録証」の携行が義務付けられるなど、外国人旅行者に対してはいろいろと制約があるようです。



宿泊先のガガーリンホテルで発行された「滞在登録証」（撮影者：佐藤氏）

## 1日目（7月1日）

慣れぬ手続きに苦労しながらも、何とか出発の日を迎えることが出来ました。上空から眺める異国の地に期待を膨らませながら、空港の出発ゲートを出てバスに揺られること数分間、駐機場で我々を待っていたのは青・白ツートンカラーのとても小さな双発機（ボンバルディア）でした。小ぢんまりした機体に不安を感じながらも、登乗してみると座席は意外にゆったりとしています。千歳空港を13時に出発して、約1時間のフライトでユジノサハリンスク空港に着きますが、1時間の時差がありますので、到着は15時を少し過ぎる頃でしょう。生憎、上空からの眺めは雲海一色でしたが、着陸前には薄っすらとアニワ湾を望むことが出来ました。



飛行機の窓から望むアニワ湾（撮影者：鈴木氏）

空港の到着ゲートを出ると、10年程前、研修で網走に来られていたナターリアさんが、副所長のラプコさんと通訳者のアレキサンダーさんとともに私達を迎えてくれました。そのまま車で宿泊先のガガーリンホテルへ向かい、夕食までの間、少し休憩することになりました。道すがら、車窓から流れる風景は北海道とあまり変わらず、走っている車もほとんどが日本車のせいとそれほど異国感を感じられませんでした。しかし、ユジノサハリンスク市街地に入ると、道路沿いに林立する古びた集合住宅と原色で彩られた奇抜な看板群が不思議な調和を生み出していました。集合住宅は、おそらくソ連時代の建物なのでしょう。どれも画一的な箱形で古く、一見廃墟のように見えますがベランダだけはカラフルにペイントされています。通訳者によると、集合住宅の1階は大抵

何らかのお店になっており、階上部分が住宅になっているそうです。道路は、市内の幹線ではほぼ舗装されているようでしたが、建物周辺や枝道では土が剥き出しになっており、そのせいか土埃がひどく、市街地でも地上数メートルは霞んで見えるような状態でした。街中を走る車もみな泥まみれです。また信号機が少なく、車線がはっきりしていないせいもあり、移動中に交通事故を見かけることが頻繁にありました(初日だけでも5件)。ホテルで休憩後、初日の夜はラプコさん、ナターリアさんとともに近くのレストランでロシア料理を頂きました。



サハリンの集合住宅と泥まみれの日本車

## 2日目(7月2日)

2日目の朝から、サフニロの会議室で研究交流会が始まりました。ラプコ副所長からの歓迎挨拶と佐藤団長の返礼、参加者による簡単な自己紹介の後、双方の機関から研究発表が行われました。道総研からは、鈴木研究職員が「北海道周辺におけるホッケの近年の資源状況と調査について」、佐藤部長が「道総研水産研究本部における磯焼け研究計画」、筆者が「網走湖の環境と漁業」と題して発表を行いました。サフニロからは、ホッカイエビや汽水域のワカサギ、シラウオ、南サハリン沿岸海域の水理化学環境と一次生産、磯焼けに関する研究発表がありました。発表後の意見交換では、北海道の漁業者が乱獲防止のためにホッケの漁獲を自主規制する取り組みに対して、サフニロの研究者からは法規制による強制的な措置でなければ効果が得られないとの意見が出るなど、海洋生物資源の所有権を取り巻くバックグラウンドの違いを感じさせられる一面もありました。

### <研究交流会プログラム>

9:30-10:00 歓迎セレモニー

10:00-13:00 研究発表(午前の部)

1. 東サハリンにおけるホッカイエビ *Pandalus*

*latirostris*の生物学的特長(ベガロヴァ G.V.)

2. サハリン島水域におけるチカとシラウオの分布・生物学・漁業(ズワルジナ N.K.)

3. 北海道周辺におけるホッケの近年の資源状況と調査について(鈴木祐太郎)

3. 北海道周辺におけるホッケの近年の資源状況と調査について(鈴木祐太郎)

4. 網走湖の環境と漁業(隼野寛史)

4. 網走湖の環境と漁業(隼野寛史)

13:00-14:30 昼食

14:30-17:30 研究発表(午後の部)

5. 2015年の南サハリン海岸海域における水理化学環境と一次生産物(ラストスカヤ E.M.、コレネワ T.G.、ウィブリャジギン E.N.、ツハイ J.R.、チャスチコフ V.N.)

6. 道総研水産研究本部における磯焼け研究計画(佐藤 一)

7. サハリン南西水域における磯焼けの現状について(ラストスカヤ E.M.)

19:00-21:00 懇親会(メガパレスホテル)



隼野の研究発表の様子(撮影者:佐藤氏)



メガパレスのレストランにて

左から、鈴木、ガリーナ、ミケーエフ、佐藤、ベリカーノフ、アレキサンダー(通訳者)・・・敬称略

研究発表が終了して、夕方からはメドページェフ前大統領も宿泊されたという4つ星ホテルのメガパレスで懇親会が催されました。2日目の夜は、300gはありそうな牛肉のステーキとウォッカ（ロシアンスタンダード）で交流を深めました。



サフニロの正面玄関前にて  
左から隼野、佐藤、鈴木・・・敬称略

### 3日目（7月3日）

3日目は、ラプコ副所長による研究交流の総括後、次回開催予定について協議が行われました。その結果、今後も研究交流を継続して行くことで双方確認し合うとともに、次回の研究交流は2016年6月から7月の間に北海道で開催することを決定し、第47回日ロ研究交流会を終了しました。

昼食後、チャスチコフさんの案内でサフニロの庁舎内を見学させてもらうことになりました。実験室や研究室に入ると、壁には綺麗な絵画や観葉植物がたくさん飾られ、執務スペースも十分に確保されているようです。生憎、研究員の多くはこの時期フィールドへ出ており、部屋の中はがらんとしていました。図書室に入ると、ロシア語や英語の蔵書のほかに、「動物学雑誌」や道立水試の調査報告書など日本語の図書も多く目に留まりました。また、ロビー中央には道総研水産研究本部から創立記念に贈られたというマツカワの剥製が飾られており、北海道との交流の深さが偲ばれました。

3日目の夕食は、チャスティコフさん、エレナさんとともに市内のレストランでウクライナ料理を頂きました。前菜にはホッケ、オヒョウ、サーモンの冷燻と豚の背脂の塩漬け（サーロ）が出来てきました。このサーロ、黒パンにのせてウォッカとともに食べるのがウクライナ風なのとか。メインには、羊のステーキと初めて口にウサギのスープ、飲み物には、ロシアの地ビー

ル（バルティカ No. 3）と日本では非常に珍しいウクライナ地方のワイン（クリミアワインの赤）を頂きました。

### 最終日（7月4日）

研究交流のスケジュールが全て終了して緊張が緩んだせいか、前夜のワインが進み過ぎ、少し頭の重い朝を迎えました。最終日は、ナターリアさんとイプシナさんの案内でユジノサハリンスク市内を巡り、レーニン広場や市内を一望できる山の空気展望台、サハリン州郷土史博物館などを見学しました。郷土史博物館は、旧樺太庁博物館の建物と所蔵資料がそのまま引き継がれており、また、展示品の中にはアトキンス式孵化盆や卵掬い、検卵バサミなどもあり、北海道の技術がサハリンにも浸透している様子がうかがわれました。市内を見学後、ロシア極東最大のショッピングモール「シティモール」で土産品を購入し、帰国の途に就きました。

今回は3泊4日の短い時間でしたが、研究交流のみならずロシアの文化や生活にも若干触れ、大変貴重で有意義な時間を過ごさせて頂きました。本事業の準備にご尽力頂いた水産研究本部の皆様と現地でもとても親切丁寧に対応して頂いたサフニロの皆様に対し、本稿をお借りして厚く御礼申し上げます。



研究交流の後、サフニロの会議室にて

日本側の交流団（左から4人目より右へ向かって隼野、佐藤、鈴木）、ロシア側の主な出席者（左側1人目：アレクサンダー、同2人目上段：ラプコ、同下段：ガリーナ、右側から2人目：ナターリア、同3人目：チャスチコフ、4人目：ミケーエフ）・・・敬称略

（さけます資源部 はやの ひろふみ）